

キャラクター名
京 志貴(かなどめ しき)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ	ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	UGNエージェント
	ブラックドッグ				
オプション		年齢	26(自認)	性別	男
覚醒	素体	衝動	憎悪	初期侵食率	34 %
出自	安定した家庭	経験	喪失	邂逅	恩人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	4	0	0			4	行動値	6
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	6
精神	2	0	0			2	戦闘移動	11
社会	0	1	0			1	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			R C	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
薙露蒿里 "メメント"	R C	7r+1		5		CR+剣 4
死生有命 "ポイントオブ・リターン" 100↑	R C	7r+1		25		(雷神→)CR+剣 4
運否天賦 "デッドエンド"	R C	4r+1		25		(雷神→)CR+剣+プラズマ 8

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
ストレンジフェイス	
エンブレム:ディシプリンズアクト	
思い出の一品:ピアス	
コネ:研究者	
コネ:情報屋	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
選ばれし者 "ゲイナー"	P	N		
家族	P 幸福感	N 悔悟		
"デーモンクリエイター"	P 執着	N 猜疑心		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P: 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
雷神の降臨 5	3	6	セットアップ	至近	自身	自動	100↑	
効果:	R中攻+[LV*5] 行0になる RWP34							
フルインストール 5	4	5	イニシアチブ	至近	自身	自動	100↑	
効果:	組み合わせ不可 R中あらゆる判定ダイス+[LV*3] シナリオ1回 EAP40							
鼓舞の雷 1	1	4d10	イニシアチブ	視界	単体	自動	120↑	
効果:	MPを行う 行動済にならず行動済の対象に使用可 シナリオ1回 EAP42							
CR:ブラックドッグ 3	3	2	メジャー	-	-	対決	-	
効果:	組み合わせた判定のC値-LV(下7) EAP129							
雷の剣 5	2	2	メジャー	至近	-	対決	-	
効果:	攻+5 同エン可能になる シーンLV回 HRP77							
フラッシングプラズマ 5	1	4	メジャー	視界	シーン(選択)	対決	ピュア	
効果:	対象・射程変更 判定ダイス-[5-LV(下0)] シナリオ1回 EAP42							
セキュリティカット 1	1	1	メジャー	至近	効果	自動	-	
効果:	建物のセキュリティを切ったり電子ロックを解除する EAP43							
電子使い 1	1	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果:	手にした電磁記録媒体を読み取ったり書き込んだりする EAP43							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

◇生い立ち
UGNに正式所属しつつも、特定の支部に与えない特異なエージェント。

両親と3つ下の妹との4人家族。至極平凡な日常を享受する日々を送っていた。妹とはそれなりに歳が近かったが、目に入れても痛くないとは正にこのこと。いつくになっても可愛がっていたし、妹の方も、途中反抗期を挟みつつも兄のことを慕っていた。
両親は子供の自立心を尊重するタイプで、放任主義。兄妹共々真面目な気質だったため、それで墮落することはなく、寧ろ己を律し、将来への明確なビジョンを持って生活を送っていた。兄は医者、妹は弁護士になるのが夢で、目標に向けて努力を重ねた。しかしながらその夢は叶うことはなかった。彼が二十歳になって間もなく、予備校に行っており自分だけ不在だった家が暴走したジャームに襲われる。彼が帰着いたときには既に遅く、そこには荒らされた部屋、赤く染まった床に、3つの動かない肉塊。そして得体の知れない"なにか"と目が合った。

そこから先のことはよく覚えていない。次に気付いたときには見知らぬ部屋で寝かされていた。傍には同じく見知らぬ男性。先刻までの情景がフラッシュバックし、パニックに陥りかけるが、それより早く彼に声をかけられる。「私は君を保護したのだ」と。確かに、自分は綺麗な身なりで清潔なベッドに寝かされているし、相手から悪意も感じない。よくよく見ると、どうやらここは病院(ラボの方が近いかもしれない)のような施設らしい。状況を飲み込みみるには時間を要したが、彼から事実を伝えられ、現実を把握するに至る。自分の家族はジャームと呼ばれる化物に殺されたこと。この世にはそのような異能を持った存在がいること。そして自分も事件を通してその力に目覚めたこと。それをコントロールするには技術と時間が必要であるから、そういう存在を見つけ次第保護している、とも。それらすべてを咀嚼し、自分の身に起こったことだと瞞下出来るようになった頃には、"奴等"——ジャーム、と呼ばれる存在に対する憎悪だけが残っていた。自分から大切なものを奪った奴等が憎い、そんな存在が世に跋扈している現実が気持ち悪くて堪らない。正義感なんてお綺麗なものから動いているわけではない、偏に奴等の存在が許せないという感情だけがそこにはあった。
そこから先の行動は早かった。この"ラボ"で己のシネガイドコントロールを学びながら、ジャームに対する理解を深める。いつか必ず、家族の仇を討つため。そして、ジャームをこの世からデリートするため。こんな汚い感情を抱く人間は少ない方がいい。同じような犠牲者/被害者を出さないためにも、己が手を汚し続け